

日本学生自転車競技連盟

第15回 欧州遠征事業 (平成25年度 2013年)

報 告 書

JAPAN SPORTS PROJECT B.V.

山宮 正 (Tadashi SANGU)

はじめに

15回目を迎えた今年の学連欧州遠征事業は、初めて4名の選手が同時に派遣されて来ました。以前より当方から「4名までは同じやり方で受け入れ可能」と話しておりましたので、問題無くお引き受けした次第ですが、選手4名が到着した報告の際に学連の井関副会長に今年の派遣が4名になった理由をお伺いしました。

そのご返答は 学連の理事会の席で発言があり、最近の欧州派遣事業はマンネリ化しており、立候補者も少なくなっている、この辺で見直しをしたらどうかという意見があり、学連が負担しているお金を選手強化、もしくは他の大会に使用したほうが効果的になるのではという意見も出ました。今回4名になったのは、個人負担金をアップし、参加者も4名で希望者を募ったところ、今までより希望者(14名)に増えた、これはハードルが下がったと理解した選手がいたかもしれない。ナショナルチームには選ばれないが、海外のレースに参加したいという選手は増えているので(それだけ海外のレースが身近に感じられる今日この頃のレース環境)自己負担が多少あっても山宮さんのところで本場のレースに参加するチャンスを得たいという選手だと思います。 との内容でした。

この件に関して、今回派遣された4名の学生に意見を聞きました。まず「マンネリ化」しているという点に関しては、「毎年活動内容が同じであるからこそ、自分達も行きたいと思って応募しているし、派遣選手も違うのにマンネリ化などという考え方はおかしい」との意見でした。自己負担金が増えてどう思うか? 「学生の多くが仮に全額自己負担でも欧州で活動する機会があったならば行きたいと思っているのではないか」だそうです。彼等の話によると応募人数が少ないのは、学生が興味を持っていないからではなく、派遣選手の選考方法(お察しの様にハードルが高すぎる)と決定時期が遅い点にある様子です。また、「過去に派遣された選手達が帰国後に飛躍的な成長を遂げているので、欧州遠征以上の選手強化策は無いのでは?」とさえ4名は考えおり、「もっと多くの学生が欧州に遠征出来る機会を与えてほしい」との事でした。学生から直接話を聞いて、学連理事会の考え方(一部の方?)と学生の意識・希望には、乖離した部分があると思いました。

井関副会長が仰る様に海外のレースに参加したいという若い選手は増えていて、当地において活動をしている日本選手を頻繁に見かける様になりましたが、中には不法滞在など国際法に抵触する可能性が考えられるケースもある様子です。いずれ摘発されて問題となるのでは、と危惧するところです。若い選手が海外、特にレースの本場欧州に活動の場を求めて挑戦するのは大いに奨励されるべきですが、夢と憧れが先行してしまい、国際法や現地の法律・規則を知らずに、あるいは無視するようなモラルに反する活動に関与してはなりません。今回は、欧州でレース活動为目标とする選手達が知っておくべき国際的法規の要点を「あとがき」で紹介しましたので、学生のみならず、彼等を送り出す指導者、関係者の方々にも参考にしてもらいたいと思います。

2013年 学連欧州遠征事業 日程表

9月 4日(水) 日本発、当地到着

5日(木) 午前:ミーティング 午後:トレーニング

6日(金) 午前:ミーティング 午後:トレーニング

7日(土) 午前:ミーティング 午後:トレーニング

8日(日) オランダ・Hank クリテリウムレース90km 15:30 スタート

9日(月) ベルギー・Massemen ロードレース 70.2 km 18:00 スタート

10日(火) 午前:ミーティング 午後:休息(自由行動)

11日(水) ベルギー・Sint Pauwels ロードレース 117km 15:00 スタート

12日(木) オランダ・Roosendaal クリテリウムレース80km16:45スタート

13日(金) 休息日(自由行動)

14日(土) オランダ・Krimpen aan de IJssel クリテリウム

15日(日) 午前:休息 午後:トレーニング

16日(月) ベルギー・Nieuwekerk-Waas ロードレース

17日(火) ショッピング&観光

18日(水) 当地出発

19日(木) 日本帰国

レース活動状況報告

1、Hank



大会名：特になし

開催日：2013年 9月8日（日）

開催場所：オランダ・ハンク

参加者：選手4名

阿曾 圭佑（中京大学）

金井 誠人（明治大学）

佐々木 勇輔（早稲田大学）

松本 耀介（日本体育大学）

天候：曇り時々晴れ、 微風 気温：21度

レースの状況： 1750m X 50周 約90km

出生者数： 74名 完走者数： 30名

競技結果：

阿曾選手、松本選手：スタート約17分後に集団から離脱。同じく離脱した選手達と複数回の周回遅れになりながらも走り続けましたが、残り5周で降ろされました。

DNF

佐々木選手：スタート25分後に集団から離脱。上記2名と同様に残り5周で降ろされました。

DNF

金井選手：前半から集団の中央よりやや前方に位置し、中盤では集団から飛び出して先頭グループを追走するなど、余裕のある走りを見せていましたが、約70kmを過ぎたあたりから減速し、80kmで力尽きて集団から離脱。

残り4周でトップグループにラップされたため、3周を残して降ろされました。 DNF

注：金井選手は、DNF ですが、降ろされて時点で、金井選手より前に居た選手は30名でした。今日のレースは、30位までが賞金なので、賞金外の選手で周回遅れの選手は全員 DNF となりました。

今年度の初戦はオランダ・Hank のクリテリウムレース、スタート直後に180度旋回する下りのコーナーがあり、その他の箇所も鋭角のコーナーが続くテクニカルコースです。今年4名の派遣と人数が増え、スタート前の準備なども賑やかな感じで和気藹々の雰囲気が進んだため、各選手、特に緊張していた様子は見られませんでした。

近年、9月に入ると参加者が少なくなる傾向にあるオランダ・ベルギーのレースですが、今日は出走者数が74名で、この時季としては比較的多く、本来のオランダのクリテリウムらしい形になっていました。ゆえに初戦とは言え、今日のレースをどの程度走れるか、それが4名の現時点での実力を測る尺度となると考えておりました。

参加選手の中には「Rabobank U23 Team」「Koga Team」など複数のUCIコンチネンタルチームの選手も含まれていたため、スタート直後から彼等がレースの主導権を握り、高速の展開になりました。

この流れに乗れたのは、4名の日本選手の中で金井選手のみでした。金井選手は序盤からレースの流れに乗れていて、コーナーリングなど走行技術にも安定感がありました。逆にコーナーリングで不安定だったために他の選手にコーナーで前に割り込まれてしまい、思う様に動けなかったのが佐々木選手です。彼は高速のクリテリウムレースであるにも拘わらず、ハンドル上部（ブレーキレバー・フーデット部）だけを握り走っていたため、当然スピードに乗れない上にコーナーで安定感が無く、他の選手からは「こんな不安定な選手の後ろに居たならば、危ない」と思われたに違いありません。ゆえにコーナーで割り込まれてしまうのです。

同様に松本選手もレース序盤の密集した集団内ではハンドルの下部を握っていましたが、少人数になってからは、基本に反してコーナーでハンドルの上部を握っていました。日本国内のロードレースの大半が登り坂が中心となるコース多く、日常のトレーニングも登り坂中心になりがちで、ハンドル上部ばかり無意識に握ってしまうのかも知れませんが、「ドロップハンドルは、下部を握った方がスピードに乗りやすく、コーナーなどの走行が安定する」という基本が分かっていない選手が日本には多いことに驚かされます。松本選手の走りには、コーナーリングとその立ち上がりの感覚が掴めていない様子が伺えました。日本とは極端にスピードが違うレース、しかも初戦なので、これは仕方が無いと思います。

阿曾選手は、コーナーリングなどの技術面においては特に問題は見当たりませんでした。現時点での彼の能力、特に瞬発力ではコーナーの立ち上がりのダッシュには付いて行けず、レース前半で千切れてしまいました。それでも全力を尽くしたため、レース後には腹痛を起こしていました。これは心肺機能を全開に活用したため、それに他の内臓器官、特に消化器官が付いて行けない状態に陥ったためで、過去に派遣された学生の中にも数名の選手が同じ症状になっています。いかに日頃の練習、および日本のレースで自らの限界に近い状態まで追い込んでいないかを当地のレースで実感させられました。また今日のレースでは前半において使用したギアが多少重すぎた様子でした。

金井選手も後半までアタックを仕掛けるなど果敢な走りをしていたのですが、最後は力尽きて単独で離脱。 体力不足を痛感させられました。

Hank レース写真

阿曾選手



コーナーリングなどに問題は見られませんでした
がスピード不足で前半から後方に下がって
しまいました。



金井選手



前半は先頭グループで安定した走りをしていま
したが、最後の詰めの段階で力尽きてしまいま
した。



佐々木選手



高速レースであるにも拘らず、ハンドル上部のみを握るという初心者のミスのため、コーナーでは安定感が無く、スピードにも乗れませんでした。



松本選手



最初はハンドル下部を握って走っていましたが、途中から佐々木選手と同様、ハンドル上部のみを握っていたため、やはりコーナーリングが不安定になっていました。



2、Massemen



大会名：特になし
開催日：2013年 9月9日（月）
開催場所：ベルギー・マッセメン
参加者：選手4名
阿曾 圭佑（中京大学）
金井 誠人（明治大学）
佐々木 勇輔（早稲田大学）
松本 耀介（日本体育大学）

天候： 雨、微風 気温： 17度

レースの状況：ケルメスレース 70.2 km (2.5 km X 25周)

出走者数： 41名 完走者数： 30名

競技結果：

佐々木選手： スタート直後から前方で積極的に展開し、2周目に12名の先頭グループを構成。この12名の逃げが決まったものの残り4周で単独で離脱、残り2周でおろされましたが、12位でゴール。賞金を獲得。

阿曾選手、金井選手、松本選手： 先頭グループに続く集団で無難に走りましたが、残り4周で先頭グループが後方に迫ったためラスト1周となり、13位以下を決めるゴールスプリントの結果、金井選手22位、松本選手25位、阿曾選手28位でフィニッシュ。30位までの賞金レースだったため、全員賞金を獲得。

朝からどんよりと曇り、今にも降り出しそうな空模様でしたが、スタートと同時に雨が降り始め、レース中もやむことなく降り続く生憎の天気でした。しかし、幸いにして風は穏やかで、気温も17度あったため、寒さを感じる程ではありませんでした。

Massemen のレースは、ベルギーのケルメスレースとしては距離が短く、しかもコース内は一般の交通を遮断していたので、本来はクリテリウムとすべきレースと思いますが、クリテリウムの規則（パンク、落車などでニュートラルになるなど）は採用されず、車輪交換のピットボックスも設置されていませんでしたので、ケルメスレース（一般公道における周回コースのロードレース）となります。

佐々木選手は、初戦のクリテリウム(オランダ・Hank)でハンドルの上部だけを握って走るという初心者のミスのため、全く集団に付いて行けなかったのですが、今日はその失敗を教訓として活かし、常にハンドルの下部を握る様に心がけ、スタート直後から集団の前の方で積極的に動きました。これが功を奏し、5周目に決まった12名の先頭グループに加わる事が出来ました。

今日のレースは、雨天で路面が完全に濡れていて、スタート&フィニッシュラインを通過して最初のコーナーには大きな水たまりが出来ていたため、選手達は無理をせず、慎重な走りに徹していました。ゆえに前半に構成された12名の先頭グループの逃げが簡単に決まってしまう、後半までは単調な展開となりました。

そのため、後続グループに取り残された阿曾、金井、松本の3名は、集団から離脱することなく、無難に走り続けましたが、集団の速度は遅く、後半には先頭グループが背後に迫ったため、残り4周でゴールスプリントとなってしまいました。

先頭グループに加わっていた佐々木選手は、レース後半の駆け引きでスピードが上がった際にもう一人の選手と共に離脱、1周は2名で走っていたのですが、置いて行かれてしまい、単独になってしまったため、残り2周で降ろされてしまいました。

今日のレースの距離は約70kmと短かったにも拘らず、後半の肝心な勝負所では戦いに参加出来ず、最後は単独で千切れてしまい、初戦の金井選手と同様に体力不足がはっきり見て取れました。

Massemen レース写真

阿曾選手



今日は集団の中を無難に走りました。



金井選手



スタート後、前に位置していなかったため、トップグループの逃げに乗りそこなっていました。



佐々木選手



金井選手とは逆にスタート直後から前方に位置し、積極的に動いていたため、先頭グループに加わることが出来ました。





レース前半に逃げを決めた佐々木選手を含む12名の先頭グループ

松本選手



阿曾選手、金井選手と同様、集団内を無難に走って完走しました。



3、Sint Pauwels



大会名：特になし

開催日：2013年 9月9日（月）

開催場所：ベルギー・セントパウエルス

参加者：選手4名

阿曾 圭佑（中京大学）

金井 誠人（明治大学）

佐々木 勇輔（早稲田大学）

松本 耀介（日本体育大学）

天候：雨時々曇り 気温： 17度

レースの状況：ケルメスレース 117km （13周）

出走者数：108名

競技結果：

佐々木選手：5周目の周回ラップ賞を獲得。フィニッシュは集団内。着順は不明。

金井選手、松本選手：常に集団内で無難に走り、集団と共にゴール。着順は不明。

阿曾選手：10周目に脚の筋肉が攣ってしまい、あと2周を残して離脱、リタイア。DNF。

平日（月曜日）にも拘らず108名が出走し、大集団でのレースとなりましたが、雨が降ったりやんだりの天気で路面が濡れていたため、前半から終始低速のペースで周回が進み、かなり単調なレース展開となり、落車、パンクなどの機材トラブル以外では、殆どの選手が最後まで走り切れたレースでした。

佐々木選手は前回に引き続きスタートから前方を走り（スタートも最前列に位置した）、毎周回1着通過のみに与えられるラップ賞を5周目に獲得するなど、レース前半は積極的に動きました。金井選手もこの周回ラップ賞を狙いに行きましたが、追走からの仕掛けが遅く、佐々木選手を差し切れませんでした。

レースは、8周目に2名がアタックし、3周程逃げ続けましたが、10周目に集団も2名を捕えるためにスピードがアップ。この時に阿曾選手は脚の筋肉が攣ってしまってリタイアしました。

その後、11周目には再び大集団となり、最終回のゴール手前では5名—4名—3名—2名—集団という形でフィニッシュを迎え、3名の日本選手は集団内でゴールしました。ベルギー車連の公式サイトに公示された結果では、賞金獲得圏30名のみ着順が記載され、30位以下は最後まで走っていてもDNFとされていました。

賞金獲得枠内以外の順位は、特に重要ではないという考え方だと思います。

（計測チップなどを使用していないので、余計な手間を費やさないのでしょう。）

Sint Pauwels レース写真

阿曾選手



集団の流れに乗っていたのですが、後半、脚が
攣ってしまったのが残念です。



金井選手



中盤までは佐々木選手と同様、前の方で積極的に動
いていたのですが、後半は前に出られませんでした。



佐々木選手



前回のレースに引き続き、スタート直後から果敢に動いたため、中間ラップ賞を獲得出来ました。



松本選手



今日のレースも集団内で無事に最後まで走れました。



4、Roosendaal



大会名：76e Kermisronde

開催日：2013年9月12日（木）

開催場所：オランダ・ローゼンダール

参加者：選手3名

阿曾 圭佑（中京大学）

佐々木 勇輔（早稲田大学）

松本 耀介（日本体育大学）

注：金井選手は体調を崩し欠場しました。

天候：曇り 気温：17度

レースの状況：クリテリウムレース 80km（1周長 1400m）

出走者数：42名

競技結果：

阿曾選手：スタート後、約25分で集団から単独で離脱。その後も複数回の周回遅れになりながらも走行を続けたため残り5周で降ろされたものの、最終完走者として36位で着順が付きました。

佐々木選手：残り15周あたりで5着通過までの懸賞金を獲得するなど、積極的な展開を見せましたが、後半のスピードには太刀打ち出来ず、集団後方に下がってしまい、29位でゴールし、賞金を獲得しました。

松本選手：前半は集団の中程に位置していましたが、中盤以降は最後尾から2～3番手が定位置となり（前に出れず）、集団でフィニッシュし、27位で賞金を獲得。
注：30位までの賞金レースです。

1周長1400m、8コーナー、舗装の半分以上がレンガ道で一部は波打っている様な荒れた路面といった典型的なオランダのクリテリウムコースです。

アスファルトの良好な舗装の箇所では極端なハイスピードになり、またコーナーの立ち上がりではパワーを要求されます。

阿曾選手は、この立ち上がりの瞬発力が不足しているので、今日の様なコーナーの多いレースでは苦戦が予想されましたが、スタート後約25分で集団から単独離脱。オランダのクリテリウムでは、集団から離脱して周回遅れになっても真剣に走る意思の見られる選手は、そのまま走り続ける事が認められ（コースの状況によってコミッセルが判断します）、集団の最後尾を追走させてもらえます。この規則は、近年になって採用されたもので、以前は周回遅れになった時点で降ろされていました。（失格になっていた）

コースが難しく、スピードも速いクリテリウムレースに不慣れな日本の選手達にとっては全力を出し切る練習になるので、とてもありがたい規則です。

阿曾選手も集団から離脱した後も走行を続け、複数回ラップされながらもコーナーリングの感覚、立ち上がりのスピード練習を繰り返し行えました。

佐々木選手は、前半から集団の中程よりやや前方を走り、積極的に前に出て行こうと果敢に展開し、途中1回ですが懸賞金を獲得するなど良い走りが出来ましたが、後半の詰めの段階におけるスピードには歯が立たず、後方に下がってしまい、29位でゴール。

松本選手も前半は集団の中程を走っていましたが、レース中盤以降は集団の後方に付いて行くのがやっとの状態になり前には出れず、そのまま27位でフィニッシュしました。しかしながら、初戦のクリテリウムでは安定していなかったコーナーリングが、明らかに向上している様子が見られました。

今日のレースでは、3名共、現時点でのスピードではオランダのクリテリウムの最後の勝負所では戦えないという現実を感じさせられました。

Roosendaal レース写真

阿曾選手



コーナー出口での立ち上がりの瞬発力の不足が今後の課題です。

佐々木選手



今日も前半は積極的に動けましたが、後半は力尽きて、後方に下がってしまいました。



松本選手



前半は集団の中程に位置出来ましたが、スピード不足のため、中盤は最後尾近くの位置を維持するのが精一杯といった感じでした。



5、Krimpen a/d Ijssel



大会名：特になし

開催日：2013年9月14日（土）

開催場所：オランダ・クリンペン
アーン
デ アイセル

参加者：選手3名

阿曾 圭佑（中京大学）

金井 誠人（明治大学）

松本 耀介（日本体育大学）

注：佐々木選手は体調を崩し、欠場しました。

天候：曇り時々晴れ 気温： 17度、 終了時 15度

レースの状況：クリテリウムレース 80 km

出走者数：21名

競技結果：

阿曾選手： スタート15分後に単独で離脱。 複数回の周回遅れになりながらも最後まで走り、着順は19位で賞金を獲得。

金井選手： レース中盤で積極的に動き、中間スプリントの懸賞金を複数回獲得。最後は集団でゴール、着順は12位で賞金獲得。

松本選手： レース前半から中盤は集団の後方に位置していたものの、残り10周で前の位置に出て、その時点で5名のトップグループを追走する集団の先頭を果敢に引くなど活躍しましたが、残り6周を迎える最終コーナーで無理な走り方になってしまい、ペダルが接地して落車し、リタイアしたのですが、20位の着順が付いて賞金も貰えました。

クリンペン・アーンデアイセルのクリテリウムレースは、長方形（4コーナー）で舗装は良好な状態のレンガ道ときれいなアスファルト舗装が半々の簡単なコースのため、高速レースになると予想出来ました。 スタート直後から予想通りのハイスピードになり、まず阿曾選手が離脱。 今日のレースも周回遅れになっても走らせてもらえたため、集団に複数回ラップされながらも最後まで走行を続けました。 しかし、阿曾選手は途中で集団のトップを引いたり、集団の中程に入り込むなどしたために、審判員から集団の最後尾のみを追走する様にと注意を受けました。 離脱して周回遅れになった選手は、周回遅れになった選手同士での先頭交代やグループでの走行は認められますが、周回遅れになってからメイン集団の先頭を引いたりしてはならないのです。 注意を受けて以降は、最後尾で走り続けたため、完走扱いとなり、19位の賞金を獲得しました。

金井選手は2日前のレースを体調不良（発熱）で欠場し、病み上がりの状態でしたが予想外に良く走れ、中間の懸賞金を複数回獲得しました。そして、最後まで集団の良い位置で走っていたのですが、最後のゴールスプリントでは前に出るスピードが無く、12位でゴールとなりました。

松本選手は、2日前のクリテリウムでコーナーリングの感覚を掴み始めていたため、今日のレースでも後半にはコーナーを思い切り攻められる様になっていたのですが、調子に乗り過ぎて限界を超える走り方をしてしまい、最後の詰めの段階で自爆落車してしまいました。後半になって積極的に集団を引いていた時に、観ていて「こういうパターンは危ない」という予感があったのですが、その悪い予感が的中です。同じグループに居た金井選手が「松本、落車！」と走りながら教えてくれた時、「やはり転んだか・・・」と思いました。

ミーティングにおいて「くれぐれもコーナーでは無理をしない様に」と繰り返し注意していたのですが、限界線がまだ分かっていなかった様子です。

幸いにして松本選手のケガは軽い擦過傷程度で、レース活動に影響は無く、翌日も予定通りトレーニングに参加しておりますが、本人も「調子に乗り過ぎていた・・・」と自覚していました。集団内の選手達が巧く落車を回避してくれた様子で、誰も巻沿いにしなかったのも不幸中の幸いでしょう。

近年の傾向として、9月に入るとレース参加者数が少なくなっています。そのため、集団の後方で油断していると直ぐに最後尾になってしまい、下手をすると前半で早々に離脱してしまう危険性があります。逆に密集した集団に不慣れな日本選手にとっては、少人数のグループ走行になりがちなので、展開がしやすいというメリットがあります。

特にコーナーでは左右から挟まれる様な状況が少なく、コーナーリングの技術を磨く上では良い練習になります。とは言え、限界を超えた危険な走りは他の選手にも迷惑となるので、絶対にあってはなりません。松本選手が集団のほぼ先頭位置で自爆落車した時、数名の選手が集団の前で逃げに入っていたのですが、この落車のため、集団全体が落車事故によるニュートラル規則の対象となり、そのために前を走っていた先頭グループの逃げが帳消しになってしまいました。（距離差がまだ短かったのだ）

もしも松本選手が落車していなければ、先頭グループ数名は優勝候補となる有力選手達で構成されていたため、逃げが決まっていた可能性大だったのです。ラスト10周を切つて、レースがフィナーレに向かって大いに盛り上がりを見せていた場面に水を差した形となった誠に残念なアクシデントでした。

Krimpen a/d Ijssel レース写真

阿曾選手



現在の力量では、今日の様な高速レースには付いて行けません。



金井選手



金井選手は、スピードがある程度備わっているので、ベストのコンディションならば、もっと上位に入れたかも知れません。



松本選手



残り10周を切ってフィナーレに向かう中、自身の技量を超えた無理なコーナーリングで落車、残念な結末になってしまいました。



6、Nieuwkerken-Waas



大会名：特になし

開催日：2013年 9月16日（月）

開催場所：ベルギー・ニューケルケンワース

参加者：選手4名

阿曾 圭佑（中京大学）

金井 誠人（明治大学）

佐々木 勇輔（早稲田大学）

松本 耀介（日本体育大学）

天候：晴れ 気温： 15度

レースの状況：ケルメスレース 110km（17周）

出走者数：24名

競技結果：

阿曾選手：7周目に分離した集団の後続グループになってしまい、10周目に打ち切りになってしまいましたが、17位の着順が付いて賞金を獲得。

金井選手：4周目にパンク、リタイア。しかしながら、本日は出走者数が少なかったため、オルガナイザーの配慮により、22位の着順が付き、賞金を獲得。（30位まで賞金）

佐々木選手：3名の先頭グループを追走する集団で積極的に走りましたが、残り5周で単独で離脱。ラスト4周で降ろされましたが、12位で賞金を獲得。

松本選手：今日のレースでは一番健闘して、ラスト3周まで追走グループに残ったものの、単独で離脱したため、残り2周で降ろされましたが、9位で賞金を獲得。

今年度「学連欧州遠征事業」の最終戦です。ホテルを出発する時には雨が降っていたのですが、会場に着く頃には雨は上がり、スタートの時間には気温は若干低めながらも良い天気になり、まずまずのレース日和でした。

今日のレースには、事前に公示されない不規則なラップ賞が設けられていて、しかもゴールラインから300m程度離れた別のラインがその着順判定となる特殊な形式でした。

レースは、3周目に飛び出した3名の逃げが11周目（残り6周）まで続き、集団は単調なペースで周回を重ねたため、日本選手4名も中盤頃までは難無く集団内を走っていました。

金井選手は、体調が回復し、今日の最終戦に気合を入れて臨んだのですが、4周目にパンク。

今回の遠征では「運」に恵まれなかった感じで、悔いの残る形で終わってしまいました。

集団に動きがあったのは、7周目、集団のペースが上がり2つのグループに分離。ここで阿曾選手は後続グループになってしまい、その後、先頭との時間差が開いたため10周目で降ろされてしまいました。

佐々木、松本両選手は、何とか前のグループに加わって先頭グループを追走しましたが、同じグループに居た優勝候補筆頭の選手がアタックを仕掛け、スピードが一気に上がった12周目にまず佐々木選手がスピードに付いて行けず単独で離脱。 次の周で降ろされました。

松本選手は、残り3周までグループで走れたのですが、最後の駆け引きのスピードにはやはり力及ばず単独で離脱し、あと2周で降ろされてしまいました。

パンクで終わってしまった金井選手は別として、実力のある選手達が本気で動き始めた際のスピードには、3名の日本選手達の現時点での力では付いて行くことさえ出来ない、その事実が最終戦において、改めてはっきりと確認出来ました。

今日のレースは平日(月曜日)の昼間で、しかも同じ場所で土曜日にベルギー国内のクラブ対抗のシリーズ戦(こちらは出走者140名以上)が行われたばかりとあって、24名と少ない参加人数でした。 そのため、オルガナイザーが参加した選手達に色々とお気配りをしてくれました。

例えば、金井選手は4周目にパンクで本来は DNF となるのですが、その時点での順位22位が記録され、賞金も配布されました。 また、30位まで賞金が出せれるレースだったので、余った賞金は、自分からリタイアした選手を除いて、人数分に均等に等分されて、賞金の封筒の中に加えられました。

Nieuwkerken-Waas レース写真

阿曾選手



後方グループに取り残されてしまい、10周で降ろされてしまいましたが、現時点での力としては、良く走れていたと思います。



金井選手



最終戦で無念のパンク、悔いが残りました。



佐々木選手



後半、やはり体力不足でしょうか、ちょっとしたタイミングで離脱してしまいました。



松本選手



最後までしぶとくグループに喰らい付き、体力と根性を見せてくれました。



まとめ

1、準備段階・機材など

今回派遣された4名の内、3名の所属する大学からは、過去3年以内に選手が派遣されているので、遠征経験者から準備するべきもの、そして当地での活動に関するアドバイスを受けていたので、特に問題は見当たりませんでした。

また、この3名は派遣が決定すると直ぐに私の方にEメールで連絡を寄こし、質問なども送られていたのですが、過去にまだ派遣選手を出していない日体大の松本選手からは、こちらから連絡を要求するまで何も質問は無く、準備が巧く進んでいるか心配しておりましたが、学連から配布された「注意事項」を熟読していた様子で、やはり問題点は見当たりませんでした。

今回、金井、佐々木両選手から「自転車は輪行袋（飛行機専用の）でも構わないか？」という質問がありました。それに関する回答を以下の通りです。今後の派遣事業および海外遠征を計画している選手達の参考になると思います。

まず自転車の輪行バッグが可能かどうか？ですが、以前、KLM オランダ航空では段ボールに入れることを条件としておりましたが、最新のHPでは「専用の梱包用品もしくは箱に詰めてください」という記載に変更されています。

この専用の梱包用品に輪行バッグが含まれるか、あるいはハードケースタイプのみなのかは、当方では判断出来ませんので、学連を通じて、航空券を手配している旅行会社に確認してもらって下さい。過去の学連遠征において、輪行バッグに入れた自転車のフレームが破損する事故がありました。（飛行機輪行用バッグです）

その時、航空会社は「段ボール箱に入れていない自転車は保険の対象とならない」と免責を主張し、弁償金は出ませんでした。箱に入っていれば、荷物受取の際に外部から衝撃を受けたことが証明出来るからです。バッグだと外部からの圧力など受けても痕跡が残らないケースがあるので、免責（持ち主の自己責任）になってしまう様子です。

第3戦、Sein Pauwels のスタート直前に金井選手のレーサーシューズの留め具が締め付け不可能になってしまいました。写真の様にテープで応急処置を施し、出走しました。



金井選手は、「注意事項」で指示されていた通り、スペアとしてもう一足シューズを持参していたため、翌日からはスペアシューズを使用しました。過去にもプレートが割れていたり、シューズのトラブルは頻繁に発生しております。海外遠征には必ずシューズを2足持参する、大切な事です。

今回派遣の4名は、全員、レースに行く際の自転車の手入れがとても良く出来ていました。チェーン・ギアに油污れ一つ見られない位、きちんとクリーニングされていました。この辺りも過去に派遣された経験者から話が伝わっていたのだと思いました。

2、日常生活、食事、その他

これまでの2名が4名になったため、「団体生活」に変わりました。人数が増えて一番問題となるのは、ホテルでの自炊（朝食以外は専用のキッチンで自炊生活）で4名分の食事を作らなければならず、それが2名の時よりも手間が掛かる点でしょう。

レース当日は、選手達は結構大変だったと思います。また、食事の好みなども4名となれば様々、2名ならば個人個人完全別々でも調理するスペースがありましたが、4名では若干無理があるので、この点もやりくりが難しかったはずです。

食事以外では、レースに行く際の車中が窮屈になってしまい、また、レース会場によっては更衣室がコースから離れているために車内で着替えをしますが、一度に4名は不可能なので、雨天の時などは不便な思いを強いられていました。選手達からは、4名では不都合が多いので、3名にして欲しかったとの意見が出ております。

4名になって良かったのは、これまでよりも賑やかな雰囲気（良い意味で）があり、レース前でも各選手、極端に緊張している感じが無かった点でしょう。

当方としましては、2名も4名も業務としては特に大きな違いは無いのですが、一人一人との会話の機会が少なくなってしまうのが残念でした。これは当初より予想していたので、今年は例年よりもミーティングの回数を多くして選手との会話を増やすプログラムを実践しました。しかし、やはり、個人個人とのコミュニケーションが指導には一番有効なので、2~3名の方が指導しやすいであろうと感じました。（短期間ゆえに選手との会話時間を取りにくいので）

また、4名のグループは、日頃から寝食を共にしているチームメイト（大学部活の部員同士）ではなく、遠征期間のみの「寄せ集め」です。偶然にして今回の4名は同学年で、しかもお互いに多少は面識があったので、問題となる出来事は発生しませんでした。それでも団体生活をする上で、多少のすれ違いなどが起こり得る可能性はあった様です。

3、各選手の問題点と今後の課題

* **阿曾 圭佑 選手（中京大学）**

初戦オランダ・Hankのクリテリウム終了直後から腹痛となり、その後しばらくの間、胃腸の調子を崩していました。この症状はこれまで経験したことが無いレベルまで追い込んだ時に発症するもので、過去の欧州遠征事業派遣においても複数の選手が同様の症状になっています。心肺機能が限界に近い状態で長時間走行したため、その激しさに他の内臓器官が付いて行けず、特に消化器官（腸）に異常が発生するのです。

阿曾選手の場合、日頃から腸は弱いそうなので、その弱い個所に即、症状が出た訳です。

これまでに体験したことのない類の腹痛で、日本で走っているレースの内容、そして日常のトレーニングにおいて、いかに自身の限界まで追い込めていないか、それをはっきり自覚出来たはずです。しかし、初戦において体調を崩していたにも拘らず、1レースも欠場せず、トレーニングのプログラムを全て消化したのは立派です。本人も「根性だけで走っていた」と語っていましたが、思わぬ所で脚が攣ったりしたのも内臓器官が弱っていたためと考えられますので、よく最後まで頑張ったと思います。

今後の課題としては、限界まで追い込むトレーニングを積むことと、瞬発力を向上させるインターバルトレーニングを頻繁に取り入れる必要があります。現在の瞬発力とスピードでは、日本国内でもトップ選手達に付いて行くのは困難でしょう。

***金井 誠人 選手 (明治大学)**

今回派遣された4名の中では、スピード、コーナーリングと集団内を走る技術はNo1でした。それは最初のクリテリウムレースではっきり見て取れました。

オランダのコンチネンタルチームに所属する有力選手達と先頭グループで互角に走っていました。しかし、最後の詰めの段階であっけなく力尽きてしまったのは「体力の無さ丸出し」でした。本人もレース終了後に「走り込みが全然出来ていない・・・」と自覚しておりました。また、3レースを走っただけで発熱する程に体調を崩し、第4戦を欠場してしまいました。この時季、ある種の樹木の花粉が舞うシーズンで、鼻水・鼻づまりなど花粉症の症状も出ておりました。(他の選手も森林に囲まれたコースに練習に行った日には同様の症状を発症しておりました)これはアレルギー体質によるものなので仕方が無いのですが、発熱は花粉症ではなく、雨天のレースが続いたためと思われます。いずれにせよ虚弱であると言えます。スポーツ選手にとって一番重要なのは基礎体力です。特に自転車ロードレースは競技中に天候の変化など過酷な状況下で行われる種目ですので、環境の変化への対応能力も要求されます。

今後の課題としては、もっともっと走り込んで後半でもバテない体力の養成と共に環境の変化に対応出来る頑健な身体造りでしょう。

***佐々木 勇輔 選手 (早稲田大学)**

金井選手と同様、体調を崩し、第5戦を欠場してしまいました。レースにおいても後半になって後方に下がってしまうなど、体力不足が目立ちました。僅か2週間の遠征で体調を崩してしまう様では、やはり虚弱と言えるでしょう。

佐々木選手の問題点ですが、自転車競技を見る観点、考え方に基本とのズレがあるように感じました。たとえば、初戦のクリテリウムでハンドルの上部だけを握っていたためにスピードが出ないだけでなく、コーナーが不安定になってしまうなど。レース前、そして前日の練習においても「コーナーでは必ず下を握れ！」と指示していたにも拘わらず、です。

初戦のレース終了後、「コーナー内で他の選手に割り込まれてしまう。自分もコーナーでそういう走り方をすべきか？」などと考え込んでいました。

そうではなく、鋭角なコーナーでハンドルの上を握って走っていて安定感が無いから他の選手に「こんな不安定な選手の後ろに居たならば危ない」と思われて、割り込まれてしまうのです。自転車レースでは、ドロップハンドルの下を握るのが基本で、その方がスピードも出るし、コーナーも安定する。普通は自転車に乗り始めて直ぐに気が付くはずですが、佐々木選手は、その「当たり前」が分かっていなかったのです。

「なぜハンドルの下を握らないのか？」と尋ねたところ、「深い姿勢で長時間走ると腰が痛くなるから」だそうです。ならば、まずは腰痛の治療をするべき、なのです。

まるで最近になって自転車に乗り始めた初心者相手の会話です。この腰痛に関しても話に矛盾があります。前日の練習において、彼の乗車姿勢を後方から観察したところ僅かながら片側にバランスが崩れているのが確認出来ました。そこで「長時間走って腰や肩、首などが痛くならないか？」と聞いた時は、「そういう事は無い」と言っていました。ならば、なぜ腰痛を気にしてハンドルの上を握っていたのでしょうか。

レース展開においては、無駄な所で脚を使ってしまい、肝心な所では後方に下がって最終的な着順では良い結果を出せませんでした。但し、これはまだレース経験が浅く、レースがまだ良く読めていないためで、今後経験を積んで適切な走り出来る様になるでしょう。経験が物を言う世界です。但し「レースを走るセンスがあれば」です。佐々木選手の良かった点は、第2戦からはスタートラインも最前列に並ぶように心がけ、スタート直後から積極的に集団の前に位置する走りをした事です。第2戦ではこれが見事に功を奏し、12名の先頭グループの逃げに加わりましたし、第3戦では中間ラップ賞を獲得しました。この積極性は、高く評価するに値します。



ほぼ180度旋回する鋭角コーナーで、ただ一人ハンドル上部を握った状態でコーナーを走る佐々木選手。安定感が無く、スピードも出なくて当然です。

***松本 耀介 選手（日本体育大学）**

最後まで大きく体調を崩す事無く、ただ一人、後半に向かって調子を上げて行きました。第5戦で落車した後も気落ちすることなく、翌日の練習にも参加。最終第6戦では一番最後までしぶとくグループに喰らい付く根性を見せてくれました。

4名の中では、体力・精神面で勝り、一番スポーツマンらしさを感じさせられたのが松本選手でした。今回の遠征においては、学連の「ロードレース・カップ・シリーズ2013」の現時点でのランキング1位と5位の選手が最初に体力の無さを曝け出すという皮肉な結果でした。これは言い換えるならば、日本のロードレースのレベルの低さを物語っていると思います。（瞬間的なスピードが多少勝っているだけで、あとは走り方の要領の良さだけで勝てるのでしょうか）まずは遠征日程を完遂する、それが一番重要なのです。松本選手の問題点ですが、佐々木選手と同様に初戦のクリテリウムで常にではありませんが、ハンドルの上部を握っている場面が多く見られました。そのため、コーナーではぎこちない走りになり、コースアウトすれすれというシーンもありました。

それにしても学連から派遣されて来る大学生選手には、過去にも「これまで一度もハンドルの下を握ったことが無い」と驚かされる素人丸出し選手が居ましたが、ドロップハンドルは、下部を握ることによってスピードが出て、ハンドリングも安定する、こんな基本的なことは他人から教わるまでも無く、自分自身で感覚として分かるはずと思うのですが、分からない選手が存在しているのが現実です。

松本選手も佐々木選手と同じく、第2戦からはハンドルの下部を握って走るように心がけ、走りが大幅に改善されました。

今後の課題ですが、阿曾選手と同様、瞬発力が不足していて、特にコーナーの立ち上がりでは苦戦していたので、瞬発力を向上させるインターバルトレーニングを多く取り入れた練習プログラムを組むべきでしょう。



ハンドル上部を握った状態でコーナーに入り、バランスを崩して他の選手の走るラインから外れている松本選手。

あとがき

私が海外のレースに挑戦するため、日本を離れたのは1983年ですので、既に30年以上の歳月が流れました。当時、海外は現在と比較するとまだ遠かった（東西冷戦時代でもありました）ので、渡航に際しては現地の状況や空港での手続きなど出来る限り詳細を調べ、観光ガイドブックや旅行者用の辞書を常に携帯したものです。これは私に限ったことではなく、同じ時代に海外に個人で渡った仲間達も同様に情報収集に時間を費やしていて、お互いに現地の情報を交換をして臨んだものです。（自転車選手以外の人達も）

近年、インターネットの発達により、世界中の情報が実に簡単に入手可能になりました。ところが98年から日本の自転車選手の当地における活動をサポートする仕事を行っておりますが、今日に至るまで誰一人として当地の状況（使用言語や滞在地の地理的状況、近郊にどのような街があるかなど）を知らずして来た選手が居ないのです。今回の4名も同様に、PCやスマホを持参していて日本でも頻りにインターネットを閲覧しているのでしょうけれど、必要となる情報収集には活用されていないと感じさせられました。

しかし、海外の情報収集に関しては若い選手達に限ったことではなく、彼等を指導する年配の指導者、競技関係者も同様に、海外の状況、活動の実態を全く調べずに選手達に無責任に海外への挑戦を奨励し、中には「1~2年は帰って来るな」などと現実には不可能な話をしている指導者も存在しています。

学連では現在、学生が実業団チームに登録する事を認めていて、学生が多くのレースに参加出来る環境が与えられていますが、それに伴い学生が海外のレースに遠征したり、実業団選手達の国外でのトレーニングキャンプに加わるといった機会も増えています。

しかし、選手および彼等を送り出す側の人達が情報収集を怠って、海外の情勢、実態を把握せずに夢と憧れのみが先行し、安易な海外遠征に走る危険性があると危惧しております。ゆえに今回は、欧州でレース活動をするにあたり、知っていなければならない国際的な法規と近年の情勢に関して、重要な項目をいくつか説明致しますので、選手を送り出す指導者の方々も含めて参考にして頂きたいと思います。

1、欧州（シェンゲン協定加盟国）に滞在可能な日数

以下、最近「在ベルギー日本国大使館」から在留邦人宛てに送られてきた情報です。
シェンゲン領域内における観光等の短期滞在者の滞在可能な期間は、最初の入域日を起算日として、同日以降の6か月のうち最大3か月以内とされていますが、2013年10月18日以降、直近の180日以内に90日間の滞在が可能となるよう規則が改正されますので注意が必要です。

シェンゲン領域（2013年8月現在）アイスランド、イタリア、エストニア、オーストリア、オランダ、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク

上記の規則を無視して直近の180日以内に90日以上滞在しているとオーバーステイとなって不法滞在者になってしまいます。以前は、出国（日本に帰国する際）においては、オーバーステイが特に問題視されておらず、「欧州は、去る者は追わず、だ」などと言われていて、「滞在中に見つからなければ大丈夫」と期限超過で滞在をしている日本人が居ましたが、最近では出国の際に捕まったという日本人の投稿をインターネット上で多数見掛けるようになりました。それも滞在していた国以外で捕まるケースが多い様子です。

（例：スペインに滞在、フィンランドの空港で発覚。あるいはフランスに滞在、ドイツで捕まる、など）では、規則を無視してオーバーステイとなって捕まるとどうなるか？一時的に身柄を拘束され（国によっては留置所で）、罰金を科せられた上にその後5年間はシェンゲン協定加盟国に入国出来なくなるそうです。よって、長期に渡る活動を計画する場合には、滞在可能日数を決して超過しないように注意が必要です。

2、ビサとは？

ビサ（査証）が何であるか、多くの日本人が分かっておりません。当地において「私は観光ビサで来ているので・・・」などと話す人が居ますが、欧州の殆どの国において、日本人は「観光を目的とした90日以内の滞在はビサは不要」と定められているので、日本人に対して「観光ビサ」が発給されることなどないのです。

アマチュアスポーツ選手のスポーツ活動は、趣味の範疇で「観光等」の一部と判断されますのでビサの取得は不要です。企業から欧州に短期出張で渡欧する会社員などもビサ不要の対象とされています。ビサの取得が必要となるのは、観光以外の目的の場合で、その目的に応じて各種のビサが存在します。（労働ビサ、学生ビサなど）

ビサとは簡単に言えば「（観光以外の目的で）入国する際に必要な通行手形」です。

このビサを申請するためには、活動を許可する証明書が必要となります。労働が目的ならば労働許可書、留学ならば現地の学校の入学許可書です。労働許可書は、雇用主（現地で法人化された企業・組織）が申請するものですので、まず雇用者との雇用契約が必要となります。アマチュアのスポーツ選手が90日間を超える長期滞在をする場合、どうすれば良いか？国によっては、公的なスポーツ組織に登録することにより、「スポーツ研修ビサ」が発給される様子ですが、ベルギー・オランダには残念ながらそれに該当するビサは存在しないので、観光目的としてビサ無しで入国し、90日間の日数のみの滞在しか出来ません。プロスポーツの選手として当地のチームと契約する場合には、労働許可書と労働ビサの取得が必要となります。ベルギーで就労を目的としたビサを申請出来る条件は、最低年間賃金が38665ユーロとされています。（2013年1月に改訂された規定です）日本円換算で年収約500万円です。つまり、プロ選手としてベルギーのチームと契約する場合、この金額以上の報酬契約が成立しないと労働許可とビサは取れないという訳です。UCI Pro TeamではUCIが定めている最低賃金が約35000ユーロだそうなので、規定を満たすことが可能と思いますが、必要となる許可を取得するのに十分な額に達しな

いチームとの契約話には要注意です。特に留意すべきは、欧州のコンチネンタルチームの中には、選手に給料を支払っているチームが存在する点です。本来「プロフェッショナル」と位置付けされていなくても、チームから報酬を得ると就労行為と見なされ、労働許可とそれに伴う入国ビサが必要になる可能性がありますので、契約の際にはチームが所在する国の法律および競技連盟の定めている規則を十分に調べるべきでしょう。

1990年にベルリンの壁が崩壊して以降、旧共産圏の東欧諸国の人達が西側に多く移住しています。近年ではEU加盟国が増えて、東欧諸国も多数EUに加わっています。EU圏の国に国籍を持つ人達は、EU圏内の移動、就労が自由なので、例え低賃金であってもEU圏の国で自由に活動し、無期限で当地に滞在可能ですから、EU圏外の日本人にとっては大きなハンディとなっています。旧共産圏の東欧諸国が自転車レースで近年著しく台頭しているのは、EU圏の国民である利点を大いに活かしている結果でしょう。

外国からの移民が激増した西側諸国では、不法滞在者、不法就労者の摘発・検挙が年々厳しくなっています。スポーツ選手もその対象外ではありません。数年前にベルギーに不法滞在していたロシアの自転車選手達が国外退去処分になったとTVニュースで報道がありましたし、同じ頃にオランダでは日本のプロサッカー選手が国外退去処分になった報道がありました。この日本人サッカー選手の場合、チーム側がきちんと労働許可を取得し、ビサを申請していたのですが、ビサがまだ発給されていない内に「労働許可があれば大丈夫」という勘違いで入国し、試合に出場しているのが見つかって国外退去処分になってしまったのです。(入国の目的が観光以外となってしまったので)

この様にスポーツ選手に対しても、かなり厳格に取り締まりが行われているのが現実です。プロ選手として契約する場合には、そのチームが法的に必要な事務的手続きを完璧に遂行してくれる組織であるかどうか(法人化されている組織かどうか、一つの目安となります)、よく調べることを怠ってはならないのです。

労働許可を取得するために必要となる報酬が支払われないチームとの契約話には安易に乗るべきではありません。

3、宿泊先を選択する上での注意

自転車レース活動をするために滞在する宿泊場所の選択も法律に抵触しない様に注意が必要です。原則として、宿泊施設として営業許可を得ている施設へ滞在しなくてはなりません。「少しでも安い所を」と考えると魅力的なのが一般家庭にホームステイする方法ですが、公的機関が留学生を受け入れる家庭を募集して、そこに応募して登録している家庭を除き、ベルギーでは、たとえ少額であっても金銭を受け取って他人を寝泊まりさせるためには宿泊施設の営業許可が必要となります。格安の値段でホームステイを受け入れている家庭は、営業許可を得ていない可能性が高いので要注意です。

近年、テロ活動の防止対策のため、外国人の滞在場所に関して公安当局が取り締まりを

強化していて、外国人が無許可で滞在している家庭・アパートなどは捜査・摘発の対象となっています。昔は、観光旅行者の宿泊場所などは特に問題とならなかったのですが、最近では空港で入国の際に質問され、宿泊施設の予約証明の提示を求められたりします。よって、多少お金が掛かっても、合法的に営業している宿泊施設（ホテル、ペンション、旅行者用アパート、リゾート地の貸別荘など）を選んで滞在するべきでしょう。

上記の様に欧州でレース活動をするためには、留意しなくてはならない法律が色々あるのですが、日本では殆ど知られていない、あるいは無視されているのが現状です。当方がオランダに設立している「Japan Sports Project B.V.」は、日本のスポーツマンの当地における活動のアテンド、指導を正規の業務として登録し、認可されている合法的法人組織です。自転車レース関係では、オランダ・ベルギーにおいては、日本の自転車レース界が安心して利用出来る数少ない（おそらく唯一）の現地法人です。そして、学連の欧州遠征事業は、スタートした1999年より全てにおいて合法的なやり方によって運営され、選手の強化、人材の育成において確かな実績を残している貴重な事業です。現時点において、海外遠征の経験が無い（少ない）学生を派遣するには、これを上回る方法は考えられないと言っても過言ではないでしょう。

この事実を改めて認識された上で、学連欧州遠征事業の将来を皆様に考えて貰いたいと思う次第です。

以上